

にも多く付添がついていることがわかった<表7>。

その病室で付添がつきはじめた頃の状態をみると、3人以上の大部屋よりも2人部屋の方が、それよりも個室の方が「常に寝たまま」の患者の割合が多くなっていることがわかる。

5 付添への満足感、及び不満の内容

1) 満足感

付添ってもらって「満足だった」「まあ満足だった」と感じた患者は、あわせて92.0%とほとんどであった<表8>。ほんの一握りの人だけが付添に対して「不満が残る」と感じている。

表8 付添への満足度

付添者	満足だった	まあ満足だった	不満が残る	無回答	計
家族	311 (83.8)	40 (10.8)	4 (1.1)	16 (4.3)	371 (100.0%)
親戚	42 (82.4)	3 (5.9)	2 (3.9)	4 (7.8)	51 (100.0)
付添婦	40 (60.7)	16 (24.2)	7 (10.6)	3 (4.5)	66 (100.0)
付添者不明	17 (74.0)	1 (4.3)	5 (21.7)	— (—)	23 (100.0)
計	410 (80.3)	60 (11.7)	18 (3.5)	23 (4.5)	511 (100.0)

付添者別にみると、付添婦がついていた患者の方が家族付添の患者よりも「不満が残る」と感じている人がやや多い。

2) 不満の内容

「まあ満足だった」「不満が残る」と答えた患者78名に、その不満の内容の選択肢を設け、複数回答でたずねた。

その結果、比較的多かった不満は、「気がねしながら頼みごとをしていた」(22名)であり、次いで「頼みごとをしても思うようにやってくれなかった」(19名)であった。しかしながら、現在、社会的問題となっている付添婦を雇うことでの経済的負担を問題にした「付添料が気がかりだった」は、特に不満となって表われなかった。

III 付添看護についての意識

1 付添についての希望

1) 付添は患者の希望でついたか

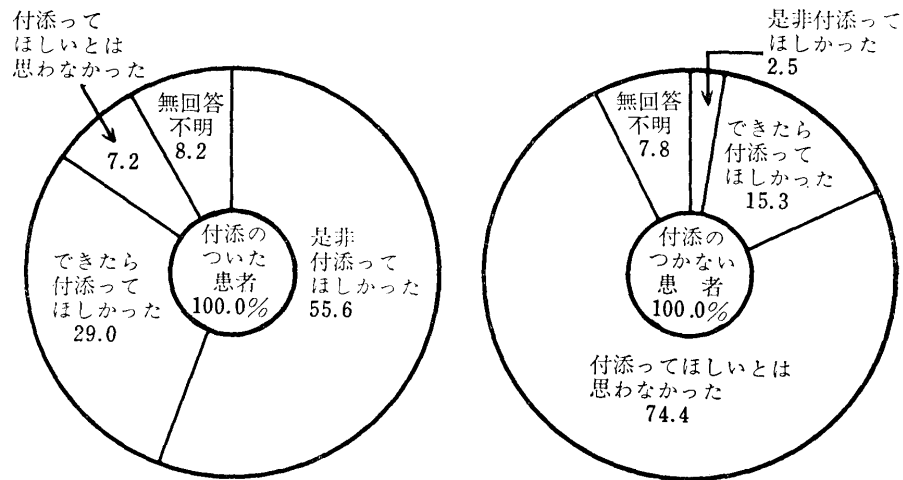
「付添なしの患者」も含めて、入院中に付添ってもらいたいと思ったのかどうかを尋ねた。

まず、「付添ありの患者」で患者自身も「是非付添ってほしかった」と思った人は、半数以上であった。「できたら付添ってほしかった」と思った患者を含めると、84.6%が付添を希望していた

ことになる。一方、「付添なしの患者」では、付添ってほしかったと思う人は17.8%にとどまり、逆に「付添ってほしいとは思わなかった」患者は74.4%にものぼった<図5>。このように、付添のつくことに関しては、だいたい患者本人の希望どおりになっていることがわかった。

また、「是非付添ってほしかった」と答えた患者の状態は、79.1%が「常に寝たまま」であった。やはり、日常生活の自由度が低い人ほど付添を希

図5 付添の有無別付添についての希望



望していることがわかる。

調査対象患者全体で、居住地域の都市度と付添希望との関係をみると、「政令市」で「付添ってほしい」と答えた患者は31.4%、「県庁所在地」「その他の市」「郡部」ではだいたい同じ割合で50%前後であり、とりわけ「政令市」において付添を希望している割合が少ない。

2) 誰に付添ってほしかったのか

それでは「是非付添ってほしかった」「できたら付添ってほしかった」と答えた人のうち、誰に付添ってほしかったかを尋ねた。結果は<図6>のとおり、やはり「家族」がほとんどで78.5%、他は「付添婦」6.7%、「親戚」3.7%、「誰れでもよい」7.9%であった。

入院病院の基準看護の承認有無別にみると、普通看護病院の場合、実態として多くの付添婦がついているが(図2参照)、希望としても「付添婦」と答えている患者が28.2%で、基準看護病院入院患者の3.7%に比べて希望率が高いことが目立つ。

性別では「付添婦」と答えている人は女性が9.0%と、男性4.8%に対してやや多くなってい

る。これは家族がつく場合、女性が主流を占めるために、本人が入院してしまうと、家族の中に付添うことができる女性がいなくなってしまうためであろう。

3) 付添を希望した理由

施設調査では、病院側の付添をつける理由を明らかにしたが、患者調査では「付添ってほしかった」人がどういう理由であるのか、予想される理由を5つ提示し、複数回答でたずねた。しかしながら、患者調査の場合、病状が重かったり、あるいは乳幼児や中学生以前で、本人が記入できない患者は調査対象者から除かれていることを考慮して見なければならぬ。

結果は、<図7>のとおり「大小便の世話をしてほしかったので」「細かな身のまわりの世話をしてほしかったので」の2つ理由が5割前後で多く、他の理由にあげたような精神的な励ましよりも、実際的な援助の手を必要として付添を希望することが多い。

この理由は、普通看護病院、基準看護病院で差はなかった。それでは上位3つの理由について、もう少し詳しくみていくことにする。

図6 付添を希望した場合誰に付添ってもらいたいのか

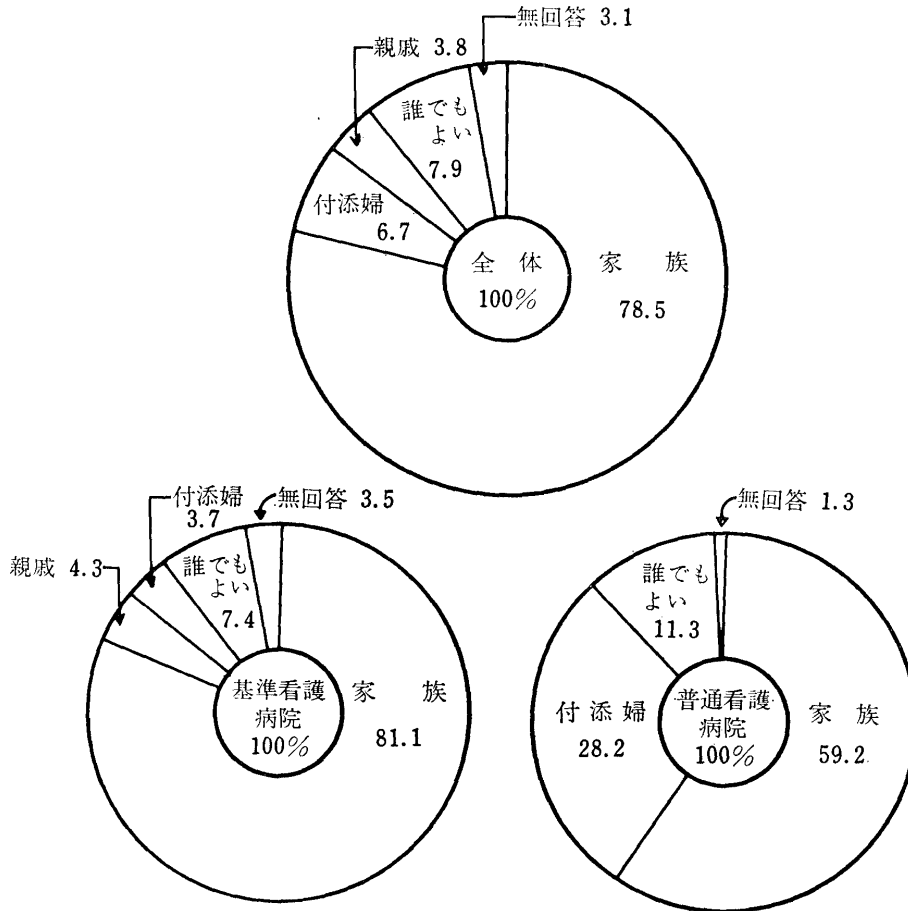
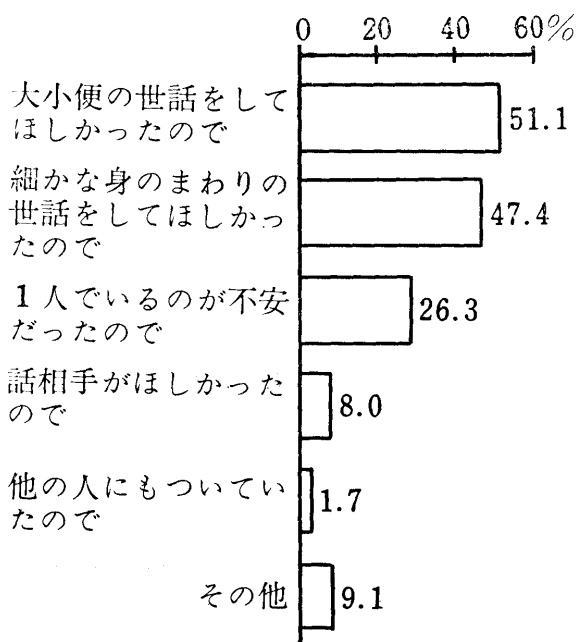


図7 付添を希望した理由（複数回答）



a. 「大小便の世話をしてほしかったので」51.1%
看護婦が行なう療養生活上の世話の1つである『排泄の世話』を看護職ではなく、多くは付添に期待していた。

『排泄の世話』を付添に期待するということは、看護婦に頼んでもすぐに来てもらえないこと、また、頼む以前の問題として恥ずかしさが影響しているためと思われる。

年齢別にみると、「35～39歳」「40～44歳」の層にこの理由をあげる人が比較的多く、60%程であった。また、性別では「男」49.8%「女」40.5%と、女性よりも男性の方がやや多くこの理由をあげている。

b. 「細かな身のまわりの世話をしてほしかった

たので」47.4%

患者にとって、「細かな身のまわりの世話」とは、病室内の整理、窓の開けしめ、必要なものはいつでもとれるような位置においておく、洗濯など環境整備面や身体を拭いてもらうのことなどと思われる。このような細かな世話は、健常者にとってはささいなことであっても、それができない患者にとっては、優先順位の高いニーズであることがわかった。そのニーズは、忙しくたち働いている看護婦には向けられず、患者のそばについている付添に気軽に頼みたいということであろう。

特に、状態が「常に寝たまま」であると7割以上の患者がこの理由のために付添を希望していた。

c. 「一人で不安だったので」26.3%

年齢別にみると、「15～19歳」の若年層の42.1%と、「70歳以上」の高令層の34.4%がこの理由をあげ、他の年齢層と比べ高い割合を示した。生活環境が変わり、特に病気の不安もある状況が、順応力の乏しい若年者や高齢層ではそばに誰かいてほしいという希望となってあらわれているのであろう。

性別では、「男」21.8%「女」32.2%と女性の方がこの理由をあげる人が多かった。また、誰に付添われたか別に、この理由をあげた患者の割合をみると、家族付添の患者のうちの27.9%、付添婦の場合17.9%と、やはり家族に付添ってもらっている患者の方が「1人で不安だったので」と訴える場合が多いことがわかった。

d. その他の理由

その他の理由を自由記載の欄から探ってみた。概して選択肢で提示した理由以外は、あまりみられず、「大小便の世話」「身のまわりの世話」を具体的に述べている回答が多かった。例えば、

・体力が思う様にいきませんので、少し動ける様になった頃自分で何とかトイレとっておきま

してもできません。ブザーを押して看護婦さんに来て戴くのですが、人によってはイヤな顔をする人も見かけます。(50代女性)

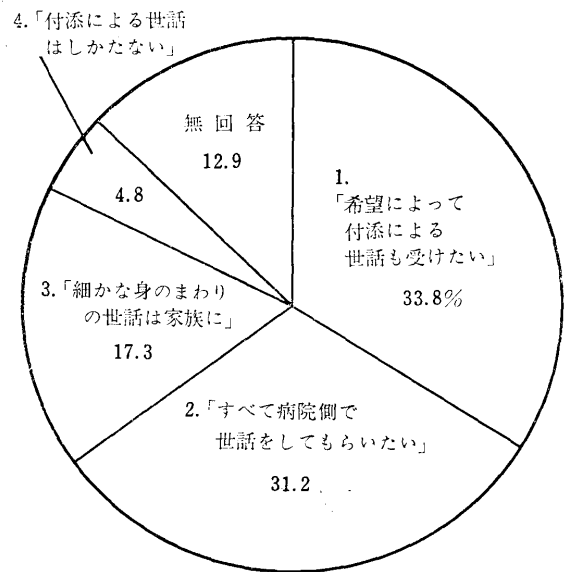
・食事をベッドアップもしてもらえない時、看護婦は食事をとれる所に置いてくれなかったの、食べたくても食べれなかった。(10代、男性)

のように看護婦に行なってほしいという意識はあるが、期待できないので付添に頼らざるをえないという意見のようだ。

2 付添のあり方に対する意識

ここでは病院の看護体制の中の付添看護のあり方についての意識を探ってみた。

図8 付添のあり方に対する意識



注. 調査票における選択肢

1. 「原則的には付添わなくてすむが、患者や家族の希望によって、付添による世話も受けられるのがよい」
2. 「入院している時は、すべて病院側で世話をしてもらいたい」
3. 「細かな身のまわりの世話は家族にやってほしい」
4. 「病院にはすべてまかせられないので、付添による世話はしかたない」

結果は〈図8〉のとおりである。「原則的には付添わなくてもすむが、患者や家族の希望によって付添による世話も受けられるのがよい」という意見と「入院している時は、すべて病院側で世話をしてもらいたい」という意見がほぼ同じ位の割合で多かった。

今回の入院での付添状況によるこの意識のちがいをみると、興味ある結果が得られた。すなわち、「すべて病院側で世話をしてほしい」という意見は、付添がついていない患者に多く、「細かな身のまわりの世話は家族に」と考えている患者は、実際にも家族が付添っていた場合が多かった。一方、付添婦が付いた患者では、「付添による世話はしかたない」という意見が多い傾向にあった〈表9〉。

表9 付添の有無別付添のあり方に対する意識(%)

付添者		付添看護に 対する 希望	すべて 病院側 で世話を してもら いたい	細かな 身のま わりの 世話は 家族に	付添に よる世 話はし かたな い	無回 答	計
付添つかない		36.9	39.6	10.6	3.4	9.5	100.0
付添 つ い た	家 族	33.1	18.1	32.0	4.9	11.9	100.0
	親 戚	35.3	19.6	19.6	5.9	19.6	100.0
	付添婦	31.8	24.2	7.6	19.7	16.7	100.0
	その他	47.9	21.7	8.7	4.3	17.4	100.0
計		33.8	31.2	17.3	4.8	12.9	100.0

しかしながら、「付添による世話はしかたない」と考えるのは、現在の病院看護サービスに対しての不満の表われであり、病院看護に期待できる体制であるならば、やはり付添わなくてもすむ方がよいということを読みとらねばならない。つまり、現状として看護サービスが不十分であるがゆえに、患者にとって付添を肯定せざるをえない状況であるといえよう。

患者の居住地の都市度別にこの意識をみた時、「政令市」と「政令市以外の地域」にわけると、両者ではその傾向が異なっていた〈図9〉。『希望によって付添による世話も受けられる』は35%前後と同程度の割合を示しているものの、「政令市」は「すべて病院側で世話をしてもらいたい」の意見が多く4割以上で、「政令市以外の地域」は「細かな身のまわりの世話は家族に」の意見が比較的多かった。

3 入院前付添が必要かどうか知っていたか

入院前から家族などの付添が必要な病院かどうかの情報を得ていたのかをたずねた。

その結果を、基準看護病院、普通看護病院別にみると〈表10〉のとおりである。建て前として付添による看護があってはならない基準看護病院では、入院前の患者・家族も「付添はいらないと思っていた」人が、普通看護病院に比べ多かったものの、2割以上もの人が「付添は必要だと思っていた」と答えている。すなわち事実上、黙認された形になっている基準看護病院の付添は、一部の病院を除いて、患者にとっても「付添が必要な」病院として位置づけられているといえよう。

また、基準看護病院であれ、普通看護病院であれ、「わからなかった」と答えている患者が20%前後あり、実際に入院してみて初めて付添が必要であることを知った際には、患者にとっても家族にとっても、そのための準備、心がまえが出来ていないことになる。特に、付添の有無別にみた場合、付添がついていた患者の中で「付添がいらないと思っていた」人も15.9%と少なくなく〈図10〉これらの人々にとっては、困惑したり、トラブルがあったりすることが当然予想されよう。

居住地の都市度別にみると、ここでも「政令

図9 居住地域別付添のあり方に対する意識

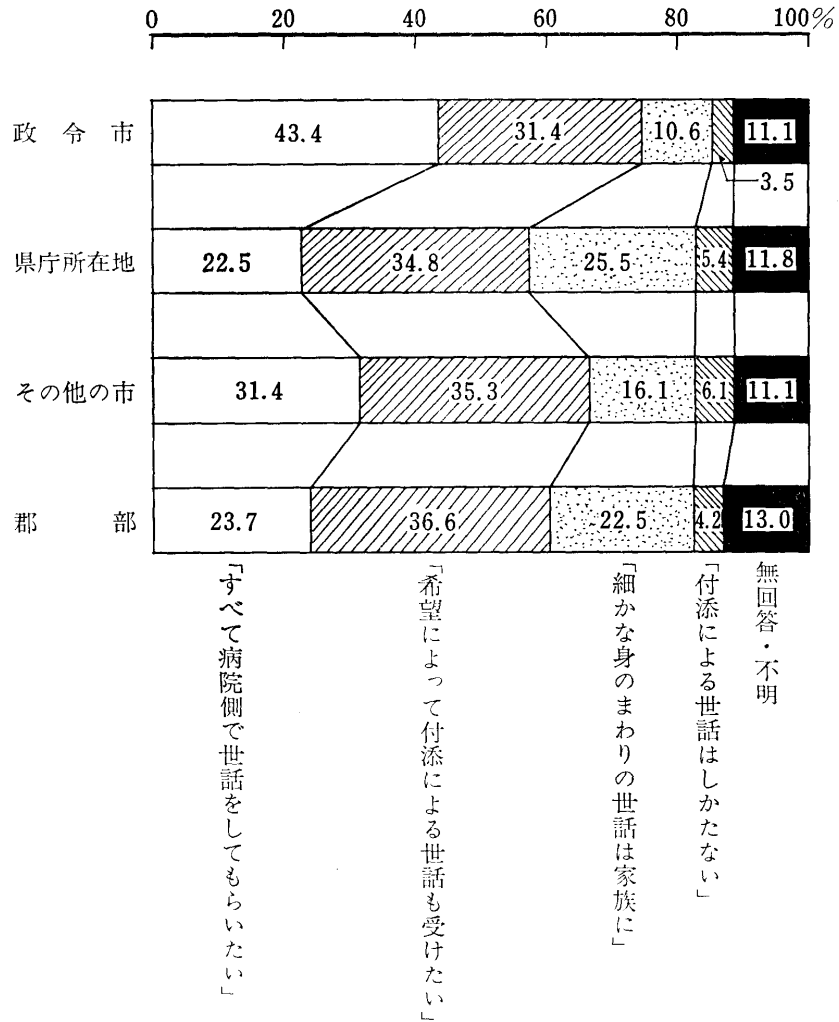
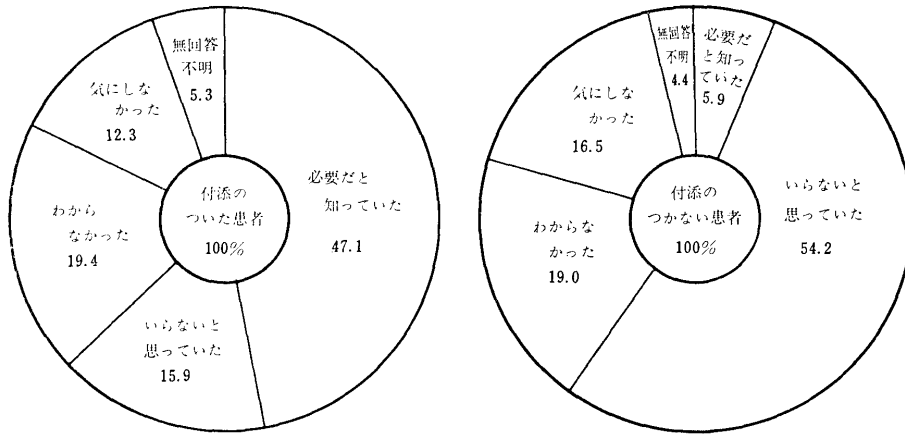


表10 普通看護及び基準看護の類別
入院前付添が必要かどうか知っていたか (%)

基準看護の類	付添は必要だと思っていた	付添はいらないと思っていた	わからなかった	気にしなかった	無回答	計
基準看護病院	22.3	39.5	18.7	13.4	6.1	100.0
特2類	15.6	47.4	17.7	12.4	6.9	100.0
特1類	40.6	23.1	19.6	12.8	3.9	100.0
1類	10.4	42.9	20.9	18.4	7.4	100.0
普通看護病院	28.4	25.8	20.4	19.8	5.6	100.0
総平均	23.1	37.8	18.9	14.2	6.0	100.0

市」と「政令市以外の地域」の2つのパターンがみられた。すなわち「政令市」では「付添はいらないと思っていた」が50.1%にのぼり「政令市以外の地域」では34.5%にとどまる。それに対し、「必要だと知っていた」は「政令市」では少なくとも10.9%、「政令市以外の地域」で27.0%であった。

図10 付添有無別入院前付添が必要かどうか知っていたか



IV 看護婦に対する期待と不満

1 看護婦，付添の業務

本項では，看護職が行なう看護行為として一般的に合意されている行為をとりあげ，それが実際に誰が行なっているのか，また患者は誰によって行なわれることを期待しているのかどうかを，特に看護婦と付添に焦点をあててまとめた。

調査票では8つの看護行為について，それぞれ「実際に行なっていた人」「あなたがしてほしいと望む人」を9つの選択肢の中から選んでもらった。集計の際考慮したことは，ここであげた看護行為は必ずしも患者全員に必要なものではないので，実施者の現状では，その看護行為が患者本人以外の誰かによって行なわれた場合，また期待する実施者では，誰かによって行なってほしいという回答を得た場合だけについて集計した。ただし「検温・検脈」だけは，すべての患者に興味のある看護業務であると思われるので，「無回答・不明」以外の回答は，すべて集計の対象とした。

また，看護行為の実施者も，期待する実施者も，

患者に付添がついていたか，いないかによってその様相が異なっていたので，付添の有無別にみた。その結果が図14である。aは，その看護行為を行なっている人の現状，bは患者が行なってほしいと思う人である。

1) 検温・検脈<図11-①>

a 実施者

付添がついていない場合はもちろん，付添がついていても，ほとんど看護職が行なっていた。しかしながら，付添が行なっていた場合も6.3%あった。

b 期待する人

付添の有無にかかわらず，大部分が看護職に期待している。現在の実施者と比べると若干看護職に期待する割合が高くなっていることがわかる。

2) 点滴の観察<図11-②>

a 実施者

「付添なしの患者」には，圧倒的に看護職が行なっている割合が高かった。一方，「付添ありの患者」で，点滴の観察を看護職が行なっている割合は2割弱にとどまり，大部分は付添が行なって